

坂本竜馬さかもとりょうま
(松口月城)まつぐちげつじょう

勤王きんのうの大義たいぎ 吾わが身みを致いたす

看みるべし 竜馬りょうまの大精神だいいせいしん

王政おうせいの復古ふっこ 容易よういならず

臥薪がしん 嘗胆しょうたん 幾いく 艱辛かんしん

何事なにごとぞ 一夜いちや 強靱きょうじんに 殪たおる

無限むげんの 痛恨つうこん 斯この 人ひとを 懷おもう

解説 坂本竜馬の王政復古の情熱と刺客に撃たれた痛恨を述べた詩。

語釈 ※坂本竜馬Ⅱ土佐藩郷士の家に生まれ、脱藩したあとは志士として活動し、亀山社中(後の海援隊)を結成した。薩長同盟の成立に協力するなど、倒幕および明治維新に関与した。※勤王大義Ⅱ天子のために忠義を尽くす意義。※大精神Ⅱ大きな心の働き。

※王政復古Ⅱ王制への復帰を理想として掲げ、神祇官の設置、神道思想の興隆に努めた。※容易Ⅱ簡単なこと。※臥薪嘗胆Ⅱ目的を成し遂げたりするため、艱難かんなん辛苦しんくをすること。※艱辛Ⅱ困難な目にあって苦しむこと。※強靱Ⅱ強いこと。また、そのさま。※殪Ⅱたおれる。死ぬ。※痛恨Ⅱ大変に残念であること。

通釈 勤王の大義の為に我が身を擲なげつた竜馬。しかし王政復古の道のりは容易ではなかった。艱難かんなん辛苦しんくに蠢うごめしている中、京都の近江屋井口新助郎において龍馬は凶刃に倒れた。痛恨の痛手であり、竜馬が生きていたならば、歴史は変わっていたかも知れない。